



「おらおらでひとりいぐも」

先日テレビを見ていたら、2018年第158回芥川賞に選ばれたこの本が映画化されたという内容で、原作者の若竹千佐子さんのインタビューなどが流れた。「おらおらでひとりいぐも」は若竹さん63歳にして初めて世に出した作品。タイトルは宮沢賢治の詩「永訣の朝」の一節。74歳の老女桃子は夫に先立たれ、娘とも疎遠の生活を送っている。その生活の中で、脳内で他者と会話するようになるというもの。若竹さん自身55歳で夫に先立たれ、これからどうしようかと思っているところで長男に背中を押され、書き始めたのがきっかけだとか。小説の中の桃子さんは、脳内では東北弁でいっぱいおしゃべりするけれど、人前ではおしゃべりが苦手な人。娘との確執もなかなか素直になれず解消できない。でも、葛藤の末自分の生を肯定し、年を取ることを肯定していく。

私の母は70歳の時、私の父である夫に先立たれ、来年13回忌を迎える。病気一つせず元気だが、アルツハイマー型認知症の診断を受け、薬を飲みながら進行を抑えている。まだ軽度なのでうちから車で10分ほどのところで一人暮らしをしている。話をしていると何度も同じ話がリピートされたり、昔の話（特に自分の都合の悪い話）はすっかり忘れていて。お勤めをしたことのない専業主婦で、割と裕福な豪農の末っ子の母は、社会性がないことこの上ない。一人で旅行もできないし、車の免許も持っていない。原付バイクに乗っていたが、ブレーキはきかない、ウィンカーは出さずに曲がる、もう恐ろしすぎてバイクはあきらめてもらい自転車を買って与えたが、足がつかないと文句を言い、タクシーに乗りなさいと言うともったいないから乗らない、100円バスの恩恵にあずかればいいのに、待ち時間が長かったのだから「いやだったから」と結構遠い距離を歩く決断をし、苦勞して家に帰っていたり。月・水・金はグランドゴルフをし、火は踊りを習っている。結構忙しそうだし、生きがいになっているのかと思えばそうでもない。口癖は「私は一人でさびしい」だ。

「老い」は誰にでもやってくる。私もいい年になってきたので老後のことを考えるようになった。母の生き方を責めるわけではない。結構とんちんかんなことを言う憎めなさがある。周りは寛大だ。どうなるかわからない未来。どんな「老い」を迎えるのだろうか。「前向き」でありたいものだ。

月	日	曜	行事予定（3年に関するもののみ）	朝	夕	備考
11	28	土	土曜講座A・全統マーク模試7：30開始			
	29	日				
	30	月	普通授業・全統マーク模試	○	×	
12	1	火	普通授業	○	○	7：25校門通過
	2	水	普通授業	○	×	7：25校門通過
	3	木	普通授業	○	○	7：25校門通過
	4	金	普通授業	○	○	7：25校門通過
	5	土				
	6	日				
	7	月	普通授業	○	○	7：25校門通過
	8	火	普通授業	○	○	7：25校門通過
	9	水	普通授業・放課後進路講座・寺子屋	○	×	7：25校門通過
	10	木	普通授業	○	○	7：25校門通過
	11	金	普通授業	○	○	7：25校門通過
	12	土	土曜講座B・土輸進路講座・合勝うどん	×	×	8：15校門通過